
舐めハメ倒された夜

～初恋男子と親友男子に堕ちました～

かずら

蜜沼書房

「……あ、裕也、さんっつ！」

裕也さんが、わたしのクリトリスをレロレロと舌で弄び、ちゅぷりと吸った。電流が走ったように、身体が甘く痺れる。

「あん……あ、あ——」

「ひよりのここ、すごい勃ってる」

「やん、あつ、あ、はあ、ん……」

ちゅく♡ちゅく♡ぢゅっ♡

裕也さんが淫らな音を立てて、わたしのクリトリスを責めたてる。

「ひよりのまんこ、スッゲーびちよびちよだね。どうして欲しい？」

裕也さんが訊ねてくる。

「――挿れて、欲しいです……」

「何をどこに？」

裕也さんがささやく。わたしは羞恥に苛まれながらも、おねだりした。

「裕也さんのを、ここに、挿れて、ください」

「ちゃんとおねだりして」

わたしは恥じらいながらも、おねだりした。

「裕也さんの……おちんぽ、を、わたしの………おまんこに……挿れてください」

「よく言えました。じゃ、ご褒美」

裕也さんの肉棒がわたしの蜜口にあてがわれ、ゆっくりと挿入される。

「ああん♡はっ、あ——！」

「ひよりのまんこ、キツくて最高。こないだまで処女だったもんな」

「や……裕、也さ……ん」

ずちゅっ♡ずちゅっ♡と、淫らな水音がわたしの部屋に響く。

「はあ、あっ、あん、あ、あん、んあっ」

緩急をつけて裕也さんが腰を打ちつけてくる。わたしの閉じた視界に火花が散った。

「ひよりっ、愛してるっ」

「わたしもっ、——裕也さんっ！」

どちゅん♡ずぷん♡ぢゅちゅん♡ずぷぷん♡

裕也さんの動きがさらに激しくなる。

「あひっ！ いああん！ あん！ あん！ ああ！ ゆう、やあ、さんっ！」

「ひよりっ、気持イイ！」

わたしも気持ちイイという言葉を、紡ぐ余裕がない。

裕也さんの熱とわたしの熱が一体になる。

「ああん！ あっ、ああっ、いくっ、いく、いく、いくっ、いくう、ああああああ——♡」

* * *

放課後の教室。

窓際にいるわたしの視線の先には、風を切るように走る蓮くんがいた。わたしの初恋男子だ。

今日もかつこいな。

校庭では、今日も男子サッカー部員たちが練習をしている。その練習風景というか、蓮くんを眺めるのがわたしの日課だった。

「よく飽きないよな」

いつの間にか桂太くんがわたしの隣に立って、呆れた口調で言う。

桂太くんはわたしと同じ中学出身で、高校に入ってからよく話すようになった。わたしの親友男子。

「蓮くんは、ホントにサッカーが好きなんだよ、だから飽きるとかじゃなく——」

「そうじゃなくてさ。ひよりが蓮を、飽きずに見つめてることだよ」

「だって、かっこいいじゃん」

「——で、告った？」

わたしは、首をブンブンと振った。

蓮くんは女子にモテる。わたしの知る限りでは、今のところ蓮くんと付き合っている女子はいない。

何人か蓮くんに振られているのも知っている。隣にいる桂太くんは蓮くんの親友で、なぜかわたしにだけ、そういう情報を教えてくれる。

「なんで告らないんだ？」

「わたしなんかが告白したって、振られるだけだもん」

「ひよりちゃんはまだもう少し、自分に自信持った方がいいよ」

桂太の笑顔に、わたしはちよつと照れた。

「ま、蓮のやつ、サッカーバカだから、今は無理かもな」

* * *

スマートフォンของเม็เซ่จี着信音で、わたしは目が覚めた。

朝日が差し込む自室のベッドから、わたしは腕を伸ばし、スマートフォンを手を取った。

なんで今頃、高校時代に夢を見たのかな。蓮くんと桂太くん。懐かしいな。

「……どした？」

隣で寝ていた裕也さんが、眠そうな様子でわたしを抱き寄せる。

裕也さんは大学のひとつ上の先輩だ。サークルで知り合って、告白されて——最近付き合うようになった。

わたしはスマートフォンのメッセージを確認する。

なぜか、ドクンと胸が高鳴る。

メッセージは桂太くんからだった。

「うん……高校の時の同級生。今度、プチ同窓会するって……」

「ひよりの実家って遠かったっけ？」

「微妙かな。東京から新幹線で一時間だし」

「そっか。帰るの久しぶりだろ？ ゆっくり楽しんでおいで」

裕也さんがわたしの頭を優しく撫でる。

わたしは高校を卒業した後、東京の大学に進学していた。蓮くんとは連絡をとっていなかったけど、地元の大学に進学した桂太くんとは、細々と連絡を取り合っていた。

結局、高校卒業までわたしは蓮くんに、気持ちを伝えられなかったんだよね。桂太くんにはホントに呆れられたっけ。

でもそれはもう二年前のこと。今のわたしには裕也さんがいる。

そんなに美人でもなく、そんなに社交的でもないわたしを、好きだと言ってくれた裕也さん。優しくて温かい裕也さんが、わたしも好き。

今、わたしは幸せ。